心臓血管外科医

須磨久善氏

■Profile

神の手を持つ天才外科医と評され、1996年に日本で初めての**バチスタ手術を施行**。また、手術器具の開発やバイパス手術の改良を重ねて、成功率を飛躍的に高めた。湘南鎌倉総合病院院長、葉山ハートセンター院長などを歴任。2012年4月、東京・代官山に須磨ハートクリニック開院。

このほか、テレビドラマ「医龍」や映画「チーム・バチスタの栄光」、自身の半生を題材とした特別ドラマ「外科医　須磨久善」（原作＝海堂尊）の医療監修を務める。自伝的小説「タッチ・ユア・ハート」で作家デビューも果たした。

当社主催の文化大学にお招きした須磨久善氏を取材しました。（平成24年11月25日取材）

時代が求めた男性像といじめられっ子のメンタリティー関わる全員がハッピーになれるツールとして選んだ医の道

医者になろうと思ったのはいつ頃ですか。きっかけは？

須磨氏　医者になろうと思ったのは中学生の頃なんですが、実は、親も兄弟も、親戚を辿っても、医者はいないんですよ。だから、周りから医者になれとか、近親者を見て医者になろうと思ったんじゃないんです。

入った中学校は幼稚園から大学まである一貫校で、その大学には医学部はなかったので、親も自分自身も、中学校入学時分には医者になるという発想はありませんでした。どうして、その中学校に入ったかというと、頭をボウズにするのが嫌だった。京阪神エリアで、丸刈りにしなくてもいい学校は2つしかなかったんです。紺色の制服の学校と、もう一方は黒の制服で、紺のほうがいいかなと思って…。

かなり軟派な感じで学校を選んだんですね。

須磨氏　将来を見据えていない選択で入って、普通に中学生時代を過ごしていたんですが、今から考えるとそれが良かったと思うんです。受験勉強しなくていい環境だったので、自分自身で一人で考える時も、仲間と喋っている時も、「将来、どうするの？」という話イコール、「社会人になって仕事を何にするか」に飛んでいくわけです。普通の学校なら、まず「どの大学の何学部に行く」というのが話の中心だと思いますが、そこを完全にスキップして、どういう社会人になるのかという話なんですよね。

競争は苦手でモーレツ社員にはなれない

それで、自分は何をしようかなという時に、東京オリンピックの頃で、日本中が沸き立っていて、求められる男性像は、「モーレツ社員」という言葉がありました。人をワーッと押し退けて、誰よりも先に手に入れる。そういう、競争に勝てる男が、出来る男だという時代だった。僕は競争とかケンカはまるっきり苦手だったんで、会社員になっても出来る男にはなれないし、自分もそうすることがきっと辛いだろうと思ったんです。そうなると、技術を身につけて社会人として関わっていく。勝ち負けだとか競争に関わりがなく、しかも、大きな組織に入って周りに振り回されるというのでもなく、できるだけ「自分」対「関わった人」という小さなユニットの中で、社会的に見ても真っ当な仕事と言って貰えて、できれば相手が喜んでくれて、それで自分も嬉しい、という仕事がいいと考え始めたんですね。その中から最後に残ったのが医者で、突然、「医者になるぞ」と決めちゃったんです。

医者になるには、かなり勉強しないと駄目なのでは？自分だったら、なかなか選択肢に挙げられません。

須磨氏　受験勉強をさせない学校で、勉強をそんなに熱心にやっていない子のくせに、よく医者になるぞと思い込めたね、と言われますが、まず思い込んじゃったんですよ。ここまで考えたんだったら他に選択肢はない、というところまで決めた。そこから自分一人で勉強して、なんとか、医学部に行けたんですね。

それだけの思い込みがあれば、モーレツ営業社員にもなれたんじゃないかと思いますけど。

須磨氏　よく言われますね。他の仕事をやっていても絶対に成功している、と。でも、子供の頃の自分は今で言ういじめられっ子でした。3月生まれだから、小学校の頃って前の年の4月～5月生まれの子たちと比べると体も小さいし、性格的にもあまり競争とかしない子だったから、一番いじめやすい子だった。あの頃のメンタリティーだと、やっぱり、競争社会に入るなんてことはとても考えなかったですね。

助からないはずの患者を助ける子供が憧れたスーパードクター

医者を目指し、その中でも心臓外科医を選択した理由は？昔から手先は器用だったんですか。

須磨氏　いやぁ、家庭科の時間に雑巾を縫ったら、お前は下手だと言われたから、器用さが抜きん出ていたわけではないと思います。これもいい加減な話で、周りに医者のモデルがいなかったから何科でもよかったんですが、「ベン・ケーシー」という海外ドラマがあった。脳外科医なんですが、手術が上手で、助からないはずの患者を全部助けていく、凄いスーパースターのドラマで、みんな観ていたわけですね。当然、子供心に格好いいと思うじゃないですか。

「医者になるということは外科医になることだ」とスタートの段階で自分で勝手に思い込んでいたんですね。

で、心臓を専門にする外科医になるかどうかを決めたのは大学にいた頃。ちょうど入る直前に史上初の心臓移植が南アフリカで成功して、新聞の1面トップで報じられたぐらいセンセーショナルだったんです。だから、心臓を手術で治すというのが学生時代の頭に焼き付いていた。それと（2012年2月に）天皇陛下が受けられたバイパス手術。これがアメリカで爆発的に広まってきた頃で、図書館でアメリカの医学ジャーナルを見ていると、こんな手術が出てきて、こんなに効くんだと紹介されていて、またそこで、「心臓外科医か」と思ったわけです。

日本初の挑戦 バチスタ手術

日本初のバチスタ手術に際して、不安はありませんでしたか。どうして、挑戦しようと思ったんでしょうか。

須磨氏　やっぱり基本は、それがうまくいけば、人を助けられるから。自分の中でしっかりとした信念がないと、何事もチャレンジできないと思うんです。特に、人の命が関わっていて、自分がその成功体験は積んでいないわけですよね。だから、これほど不安なことはない。けれども、いつかは誰かがやらなければいけないわけだし、やらなかったら、結局、その人は死んでしまう。やらないという選択肢も正当化することはできるのかもしれないけど、僕に「助けてくれ」と言ってきた人を助けるチョイスではないわけですよね。

医者を選んだ原点

やっぱり、なんで医者になろうかと思ったか。その原点に立ち戻った時に、有名な医者になろうとか、お金持ちになろうとかではなくて、社会人として人と関わって、その人も自分も一緒にハッピーになれるツールとして医者を選んだわけです。だから、助けてくれと言ってきた人に「助けてあげられません」とか「僕には出来ない」という答えは、限りなく少なくしたい。今まで誰もやっていないとか、僕自身に経験がないというのは、相手に対しては理由にならないわけですね。だから、もちろん、何の下ごしらえもせずに突然やったわけじゃなくて、徹底的に勉強して、経験ある人を海外から呼んで立ち会ってもらって、患者さんにも全て見せて説明しました。それでご本人さんと奥さんが考え抜いて「やってほしい」と言ってこられたわけだから、不安といえば不安ですけれども、「不安だからやらない」という選択肢はなかった。前に進むしかないと思ったんですね。

残念ながら1回目の患者さんは亡くなられたそうですが、2回目をやらないという選択肢はなかったんですか。

須磨氏　1回目をやると決めた時の覚悟というのは、その結果次第で「ごめんなさい。もう二度としません」とか、そういうチョイスはないわけですよ。徹底的にこの手術をやり遂げたら、今まで助からなかった人たちが助かるようになるはずだと思い、そのための準備は自分自身も環境も全部、できる限りのベストの状況を作ってきた。それでGOサインが出たわけですから。最初から全部うまくいくなら、それが一番いいことだけど、そんなに簡単なものではないこともわかっている。だって、海外の他の国でも、初めてやった人たちが5戦全敗とか2勝2敗とか、必ず非常に痛い目を見ながら、この手術に挑んでいたわけですよね。

最初の患者さんは、手術をやる直前までの段階でも安全を期したし、やった手術も、3人の海外の教授たちからも、それでいい、と言われる仕上がりで出来たわけです。けれども、残念ながら手術前に体力が落ちていて、肺炎を起こして亡くなられました。だから、もちろん、成功したわけではないけれども、手術そのものをやり損じたわけではないし、「こんな手術、僕にはできない」と思ったわけでもないから、やっぱり、これはやり続けていくしかない。ただ、外科医はやる気満々でも、2人目の患者さん、やってくださいという人がいなかったら手術って出来ませんから。

周囲の環境にも恵まれての挑戦

1回目は成功しなかったとなると、不安で、なかなか手術を受ける決心が付きませんよね。

須磨氏　だから、その状況をよくご存じの上で、やってください、という患者さんが出てきたのも巡り合わせですね。

周囲からの反対はなかったんですか。1回目はGOサインが出ても、2回目には、やっぱりやらないほうがいい、という判断もありそうですが。

須磨氏　そうですね。だけど、その時の病院長がよく出来た人でね。最初の患者さんを手術する段階で、倫理委員会で徹底的に話をし、僕が今までどれだけ勉強してきたかもわかった上でGOサインが出ました。ですから逆に、2人目の方が候補として出てきた時に、「ここで引いては駄目ですよ。存分に、得心がいくまで、ちゃんとやり続けてください」と言っていただきました。

環境にも恵まれたんですね。

須磨氏　そうなんです。そういう挑戦は一人の気持ちとか能力だけで出来るんじゃなくて、やっぱり、支えてくれる人たちがいたお蔭で出来たわけです。

ありがとうございました。

（取材　太田憲利）